さいたま市立宮原小学校
学校だより
令和8年1月8日　第9号

学校教育目標
・たがいに努める子(やる気)・たがいにきたえる子(元気)・たがいに手をとる子(勇気)

揃(そろ)えない

井　上　　雅　史

明けましておめでとうございます。皆様が健やかに新しい年を迎えられたことを、心よりお慶び申し上げます。そして、令和８年が、皆様にとって幸多い年となりますようお祈り申し上げます。

さて、冬休みに入る前に、児童によく伝えることの一つに「年末年始は伝統的な行事も体験しましょう」という内容があります。大掃除、除夜の鐘、しめ飾り、年賀状、初詣、お節料理、お年玉、等々、年が改まる前後はこの時期独特の行事や風習が数多くあります。今の時代は、以前ほどきっちりと行わなくなったり、遊び場の減少で凧揚げや羽根つきなどの、この時期ならではの遊びが難しくなったりということはありますが、それでも、この時期独特の雰囲気と行事にワクワクしてしまいます。

年末年始は、世の中に溢れる音楽も少し様子が変わります。年が明ける直前まではテレビやラジオ、街中のＢＧＭ等はにぎやかなポップスを中心とした音楽でいっぱいです。しかし、年をまたいだとたん、琴(箏)や尺八、笙(しょう)などの和楽器を使った、日本の伝統的な音楽が目立つようになります。普段、日本の伝統音楽に触れる機会のない方々も、このような音色を聴くと「お正月だな」と感じるのではないでしょうか。

６年生の音楽で「越天楽今様」という平安時代から伝わる曲を学習します。この曲は、お正月によく聞こえてくる「雅楽」の「越天楽」に 慈鎮和尚という平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての僧侶が歌を付けたものです。「今様」とは「今風の」「はやりの」などという意味で、当時、歌として広く流行し、のちに「黒田節」の元歌にもなっています。

「越天楽」を含む「雅楽」という音楽は、千年以上の歴史を持つ「世界最古のオーケストラ」とも言われる日本の古典音楽です。ただ、今知られているオーケストラと大きく違い「一糸乱れぬように音をぴったり揃える」ことを**「あえてしない」**と言う特徴があります。

例えば、楽器ごとに装飾音の入れ方や吹き始めるタイミングを少しずつずらすことで、一つの旋律が幾層にも重なり、独特の厚みと奥行きを生みだします。そうすることで、各楽器の個性を消さずに「違う音が同時に存在している状態」を楽しめるようにしています。

また、演奏者同士が互いの呼吸を感じ取りながら、「今だ」という絶妙なタイミングで音を出す「間」を重要視するため、メトロノームで刻むような一定の速さや拍子もありません。一定の速さや拍子がないので指揮者もいません。前に座る打楽器の一人が合図は出しますが、テンポや拍子を支配するためではなく、全員の「阿吽(あうん)の呼吸」を引き出す役割に近いものだそうです。 こうして生まれる「雅楽」の揺らぎのあるリズムは「波の音」や「風の音」といった自然界の音に近いとされています。

このように「雅楽」は、「個々の生命の輝きをそのままに、自然の呼吸で調和させる」という、日本古来の深い精神性が反映された独自の美学があるので、**「揃えない」**のです。

「雅楽」を単なる古い音楽と思って聞けば、眠くなる退屈な音楽かもしれません。でもその意味を知って聴くと、その良さや面白さ、美しさに気付くことができるようになるのではないでしょうか。

本日より令和７年度の３学期が始まりました。３学期は学年のまとめの時であり、次の学年に向けて準備の時となります。短い期間ではありますが、「雅楽」のように一人ひとりの児童の良さを引き出しながら、それぞれの輝きを更に増すことができるよう、「やる気・元気・勇気」を合言葉に、皆様と力を合わせて丁寧に教育活動に取り組んでまいります。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます